

糾弾でも擁護でもなく

これまでに新聞や雑誌で報道された文学作品の盗作騒ぎについてまとめた『〈盗作〉の文学史』（新曜社）がじわじわと売れ行きを伸ばしているという。

数々の盗作について資料を収集し、検証を加えていった原稿用紙にして約9000枚の労作。この1冊を読めば古今の盗作騒動のすべてが分かる、と言ってもいいだろう。「盗作大全」として読めると同時に、マスメディア論、文芸評論としても楽しめる読み物になっている。著者で、評論家の栗原裕一郎さん(43) 〓写真

〓に聞いた。

「(盗作は)『首尾の程度』に還元される、本質的にしよばい問題」。そんな序文で始まる本書

『〈盗作〉の文学史』著者、栗原裕一郎に聞く、



は、明治期から、今年のはじめまでの盗作騒動を取り上げています。調査は平成16年暮れから始めた。資料を渉猟し、調べられるものは徹底的に調べた、と振り返る。

「割に合わないですけど、それは性分ですわね」

盗作騒動については、作家との関係も

あり、出版社が尻込みするケースも多い。これまでに資料と呼べるような書籍は皆無に近かった。本書も、当初は別の出版社から出す予定だったが、原稿を読むなり「こんなものは出せません」と拒否されたそうで、「お蔵入りするかな」と、思った時期もあったとか。

「ゴシップをゴシップで扱わない。糾弾でも擁護でもない。批判はしない」という方針で書かれた本書は、学術書に近い。一読すれば、これまでにこうした本がなぜなかったのか不思議に思えてくる。

今年7月に出版後、予想通りに文芸誌からは黙殺されたが、新聞などに書評がいくつか出るなどして、売れ行きは悪くないという。「書評も出ないだろうな」と思っていましたから、自分でも意外でびっくりしました。この本はお金にならないのは分かっていた。息長く売れてほしいですわね」